

『人生の踏絵』

2017年03月18日

小説家 遠藤周作氏が紀伊國屋ホールで行った九つの講演を『人生の踏絵』という表題でまとめられ、今年の1月に「新潮社」から出版されている。遠藤氏の講演を私の近隣の「南部病院」のホールで聞いたことがある。病気についてのユーモア溢れる話で、自由な人であるという印象であった。『人生の踏絵』は遠藤氏の代表作『沈黙』から始まり、キリスト教文学、ご自身の宗教観について語っている。聖書やキリスト教を知らせる遠藤氏の伝道論として読んだ。

『沈黙』は、キリシタン禁制時代、過酷な迫害を受けるキリシタンに対し、神は沈黙しておられる不条理をテーマにしている。遠藤氏は、迫害で殉教した人々については多くの証言が残っているが、背教した人々については証言が少ない。その沈黙から、彼らの声を引き出したい思いがあったと言う。また、背教した宣教師フェレイラが主人公のロドリゴに、「この国は考えていたよりも、もっと怖ろしい沼地だ。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった」と語り、背教を促す言葉を書いている。この言葉は、キリスト教が日本で受容される可能性を模索し続けた遠藤氏の原始ではないか。ロドリゴは踏絵を踏んで転び、陰の主人公と思えるキチジローは幾度も踏絵を踏んで、自分の弱さを泣き叫ぶ。遠藤氏は、踏絵が「踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分かっため十字架を背負ったのだ」と呼びかけたと書き、峻厳な父親のイメージではない、弱さを抱擁する母親像の主イエスを描いている。踏んではならない踏絵を、踏んで来た人生ではなかったかという問いかけを聞くようで、「然り」と言う他ない。

フランソワ・モーリヤック、グレアム・グリーン、アンドレ・ジッドなどの小説を解説しながら、キリスト教文学の立ち位置について語っている。キリスト教のパンフレットの、護教的な小説は人間の真相を描く小説とはなり得ない。表面に表れ得ず、心理学でも分析されない、人間の心奥のドロドロした部分をキリスト教文学が扱う。なぜなら、そこにこそ、神が関わっている。救いがないと思えるところに、罪を赦す神が現れるからであると言われる。下記のように語っている。「道徳的に正しいことをする、世間から褒められることをする、ということも大事なことでけれども、神や仏にとっては、そんなことはどうでもいいのではないか。抑え込まれている自分、外面でない自分、道徳や世間や社会から否定されている自分こそが、神や仏が語りかけよう、助けよう、愛そう、抱きしめようとする対象ではないか。」主イエスの生涯が、まさにそうであった。また、「良いこともできず、悪いこともできないような奴には、神さまがわからない。そんな奴がいたら、神さまだってどこかへ行ってしまふ。つまり悪い奴というか、罪びとほど、神さまのことがわかる。逆に言えば、神さまを知るには、罪びとを知らないといけない。その意味で、罪びとは世界の中心であり、本質なのだ」とも語っている。福音書には、悪霊に取りつかれて苦しんでいる人が、真っ先に主イエスに対し、「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから。苦しめないでほしい（マルコ5:7）」と叫んでいる。彼こそが神を見ているのである。小説家には、自分プラス「X」の力が働くと言う。アンドレ・ジッドは、それを「デモーニッシュ」と言っている。「狂」であろう。主イエスもパウロも「狂」であったと思う。「狂」が時代を突き破っていくのである。しかし、「狂」を持った人は大きな苦難を負う。「狂」を持たない自分であったことに安堵して、読み終えた。